

～旧約聖書を読んで感じること～ (68) 反逆者シェバの首を討つアベルの女

ダビデがアブサロムの謀反でエルサレムから逃亡しなければならなかった時、権力の興亡の悲劇をダビデは思い知らされ、心を痛め、すべてを神が見ておられることを心に刻みます。

まず、ダビデの顧問であった**アヒトフェル**がアブサロムに付き、最初にアブサロムに提案したことはダビデを侮辱し、アブサロムにも恥ずべき行為である、ダビデの側女の凌辱でした。攻撃に関してはその提案が退けられ、アヒトフェルはアブサロムの負けを感じ、自宅に帰り、首をつり自死しました。

次に、ダビデが愛したヨナタンの息子、足の不自由な**メフィボシエト**の従者**ツィバ**がダビデに食糧を提供するために追いかけて来ました。メフィボシエトは都に留まっています、「**イスラエルの家は今日、父の王座をわたしに返す**」(サム下16:3)と言っていると伝えます。これは庇護しているメフィボシエトの謀反を意味します。ダビデにはメフィボシエトの心変わりはいちもしいことでした。

しばらく行くとサウル家の一族の**シムイ**が、狂った様子でダビデを呪いながら出て来て、ダビデたちに石や塵を投げつけながら、追い回すのです。将軍ヨアブの弟**アビシャイ**が殺そうと言いますが、ダビデは「**わたしの身から出た子がわたしの命をねらっている。ましてこれはベニヤミン人だ。勝手にさせておけ。主の御命令で呪っているのだ。主がわたしの苦しみを御覧になり、今日の彼の呪いに代えて幸いを返してくださいるかもしれない。**」(サム下16:11)と言って制止します。

アブサロムが死に、ダビデがエルサレムに帰還する時、シムイが手のひらを返したようにダビデを迎え入れ、赦しを求めます。またメフィボシエトもダビデを迎えにやって来ました。彼は従者ツィバに欺かれたと訴えます。裏切り、偽の情報、権力にすり寄り身のはやさ、それらすべてをダビデは不問に付しました。ダビデは「**主が裁かれる**」と信じていたのです。



アベルの知恵ある女 Jan II Collaert

やがてベニヤミン族の**シェバ**というならず者が兵を挙げました。ヨアブが掃討に出かけました。その時、ダビデのもとにいるべきアブサロムの司令官**アマサ**を見つけ、ヨアブは油断させ、殺しました。シェバの陣営は追跡され、アベルという町まで逃げて、城壁の中に入りました。ヨアブがアベルの町を包囲した時、一人の**知恵のある女**がヨアブに声をかけました。

「昔から、『アベルで尋ねよ』と言えば、事は片づいたのです。わたしはイスラエルの中で平和を望む忠実な者の一人です。あなたはイスラエルの母なる町を滅ぼそうとしておられます。何故、あなたは**主の嗣業を呑み尽くそうとなさるのですか。**」(サム下20:18)

ヨアブはアベルを滅ぼすのではなくシェバを追っているだけだと答えると、アベルの女は「**その男の首を城壁からあなたのもとへ投げ落とします**」と、ヨアブに約束するのです。

女は知恵を用いてすべての民のもとに行き、**ビクリの子シェバの首を切り落とさせ、ヨアブに向けてそれを投げ落とした。**(サム下20:22)

戦国時代では、生きるか死ぬかで、女も戦わなければならない時代だったのでしょう。このアベルの女は平和を望むと主張しました。町が攻撃を受ければ、町民は巻き添えになり、命を落とすことになります。女は町の住民のネットワークを利用して、秘かにシェバを見つけ、殺しました。女がアベルの町を牛耳っていて、命運を図り、実際に行動もさせているのです。この共同体は命を守る思いが一致していて、指令、実行の一連の行動を完成させ、平和を勝ち取っています。彼女は知恵のある女として評価されています。ダビデに付くのも、アブサロムに付くのもない。ただ、この町に住む事、平和に生きる事、そのために最小限の被害に抑える事を願ったのです。